

「地域林業の活性化や森林の活用を考える」



長野 麻子（ながの あさこ）

株式会社モリアゲ代表

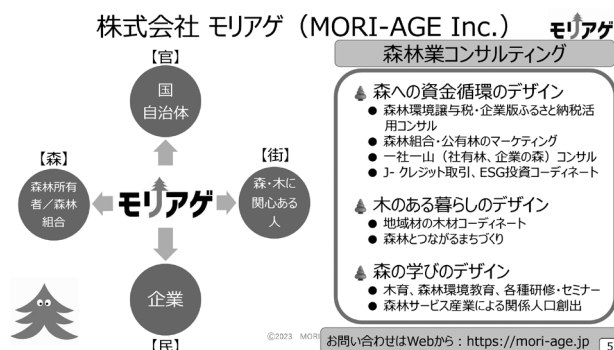
1994年 東京大学文学部卒業、農林水産省入省、林野庁企画課、バイオマス・ニッポン総合戦略検討チーム、大臣官房報道室長、広報評価課長などを歴任、2018年 林野庁木材利用課長、2021年新事業・食品産業政策課長、2022年 早期退職、株式会社モリアゲ起業

【この講演は、令和7年11月18日の令和7年度第46回行政研修（係員級特別課程）において行われました。】

おはようございます。今日は午後に飯能の森に野外実習に行きます。午前中は政策課題研究の基調講義ということで、野外実習の予備知識とか、最終日の全体討議に向けた班別討議をまとめていただくためのお話をしたいと思います。私、「モリアゲ」という森を盛り上げる会社を起業しまして、とにかく森への愛を押売するというビジネススタイルでやっておりますので、午後もしっかり森に行けるように聞いていただけたらと思います。

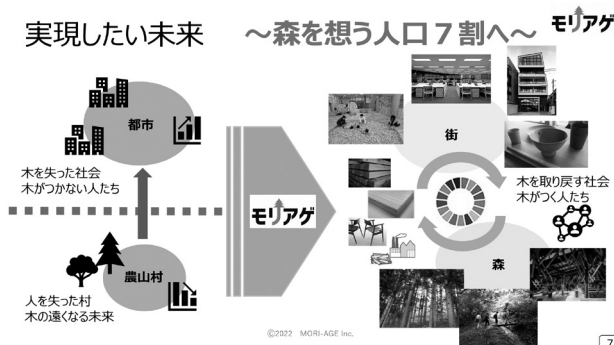
私は農林水産省で28年働きました。2018年に林野庁の木材を使う課の課長になりました。木材を使うということは、それが出てくる森のことを考えるという感じで、担当になったらものすごい森にはまって、森への思いが抑えきれずに辞めて起業しました。立場は変わりましたが、森を守っている人たちの盛り上げたいという気持ちでやっています。官と民をつなぐとか官民連携とかが大事で、特に木を使わないことで森と街の距離が離れたので、森と街をつなぐということをやっています。役所で20年以上働いていたことが結構武器というか、特に自治体の皆さんが安心してお話を聞いてくださいます。だいぶ林業界で浸透してきて、モリアゲさんとか、モリアゲ姐さんという感じで呼ばれるようになっています。

これから人口が減っていくことを考えると、もう官とか民とか言っている場合じゃなくて、地域とか日本のためにやる人たちは官も民も問わず一緒にやっていかなくちゃいけないと思っていて、そういう人たちをつなぐ役割を果たしていけたらなと思っています。主な収入となっているのは企業のコンサルタントです。森を何とかしたい、あるいは森を持っても宝の持ち腐れになっている企業とか、カーボンニュートラルだから森と何かしたいという企業が増えてきて、そういう方々に壁打ち



の相手になってあげる、林業だけでなく森全体で稼ぐ「森林業コンサル」と勝手に言っていますが、そういうのをやって各地に呼んでいただいたりしています。

愛知県で育って東京へ来て30年ぐらい働いてみて、都会も山村も限界があるので、これをうまくつなぎ合わせて循環させるのに森や木を使っていきたいと思っています。国土の7割が森なので、森を思う人を7割にしたいという気持ちでやっています。創業4年目です。役所にいるときは予算を使う方だったので、どうやって稼ぐのかなというのがありましたけど、役所のときのネットワークとか、そのつながりがすごくあるので、皆さんも



今の仕事でのネットワークはすごく大事にされることをお勧めしますし、絶対そのときにできたきっかけとつながりというのを、何かあったときに思い出すと味方になってくださる方がいらっしゃいますので、是非大事にしてほしいと思います。役人をしているといろんな担当を回るでしょう。そうすると、いろんな付き合いができるじゃないですか。その組合せが自分のネットワークの独自性になるんです。今は、その独自性を生かしたコンサルティングをするビジネスをしていると思っています。

【日本の森全体の現状と課題】

日本の国土の7割（2,500万ヘクタール）が森です。皆さんが住んでいる宅地というのは5%しかありません。農地が1割ぐらい、あとは道路とか川など。日本の国土は急峻で大体は森ということです。日本の森のうち3割は国有林として国が持っています。自治体を持っているのは1割ぐらいで、あわせて4割ぐらい。残りの6割が、個人の山主さんとか企業が持っている民有林や私有林になります。また、所有者が誰かにかかわらず人の手で植えた森を人工林といいます。特にスギとかヒノキとかカラマツといった早く育つ針葉樹を植えたのが人工林で、それが森の4割ぐらいです。結構な宝です。

国土全体に占める森林率を見ると、日本は世界の先進国の中で3位です。上はフィンランドとスウェーデンですけど人口が少ないので、人口がこれだけ多くて、これだけ森を維持している国というのはないんですよ。アメリカとかフランスは3割ぐらいしか森はありません。森を維持しながら経済も発展して人口も増えたという意味では、これからの世界が自然と共生する社会を目指すとなると、日本はお手本になれるぐらいの森林率を誇ります。

今、気候変動枠組条約のCOP30をブラジルでやっていますが、天然で生えている熱帯雨林を伐ると地球の肺がなくなる、CO₂の吸収源がなくなると言われています。人の生活に木が必要だとすると、畑みたいに自分で植えて育てたものを使いましょうとなってくる。日本の場合、人工林は植えても利用できるまで50年ぐらいかかるものですが、日本は先人が私たちに残してくれた森があるお陰で、国土面積が大きい訳でないのに人工林面積だと世界第8位です。

先ほどお話したように日本の森林の4割が人工林で、残りは天然の力で更新する天然林です。ただ、皆さんがイメージする原生林、屋久島とか知床とかは全体の3%

ぐらいで、人の手がほとんど入っていない森はそれぐらいしかないのです。また、例えば薪を取っていた里山は今やほぼ人の手が入らなくなって、藪になったり、イノシシやクマの住処になったりというのが現状だと思います。人工林と林業も、まあまあやばい状態ではありますけれども、4割の人工林と6割の天然林をこれからどうするかを我々は考えねばなりません。

人工林はスギ、ヒノキ、カラマツで8割を占めますが、肥料をやらなくても天然の雨と光で木は育つので、いい投資だと思います。今どきこんな右肩上がりが増えていくお金ってないじゃないですか。特に人工林を中心に毎年6,000万立米ぐらい体積が増えている。日本で使っている国産材の量は今3,000万立米ぐらいなので、半分しか使ってなくて、どんどん貯金が溜まっていくという感じですよ。

森づくりの基本は、利息で食っていくというか、増えている分を伐っていくとずっと使い続けられるというのが林業の世界では言われていて、日本ではまだ先人が残してくれた蓄積を使い切れていない状態なので、これからどう伐って使っていくかという話をしているところです。

戦後に一斉に植えて、それがそのまま大きくなっているので、人工林も少子高齢化です。スギとかヒノキを何に使うかというと、一番使うのは建築です。建築に使うには大体50年を超えると十分な太さになってくる。とすると、人工林の6割はもう使えるということになっているから、皆さんの地域でも木をうまく使っていくという時代になってきているということです。

人工林というのは伐って使ってまた植えて育てるというサイクルを回せば、究極の循環経済というか、人手はかかりますけれども、肥料をあげたりしなくても、日本は雨が多いので森が自然に成立するんですね。なるべくして森の国なんです。それを皆さん伐って使って植えるというのを先人たちがしていたんだけど、この森が森であるということにすごく意味があって、林業以外にもいろんな生き物の棲み家になったり、温暖化防止でCO₂を吸収したり、特に日本の今のCO₂吸収の9割は森で吸収するという計算になっています。なので、持続的に森を維持していくというのはすごく大事です。森があることで植物が土を押さえて土砂災害を防止したり、美味しい水を蓄えたり、綺麗な空気になる。今日の午後、皆さん森に行ったらすごい気持ちよくなって身体がチューニングできるよというのを是非体感してもらいたいなと思いますけど、そういう機能もある。こういった私たちが受け取る様々な公益的なサービスを含めて森の多面的

機能と言います。

木材生産の他、栽培きのこ等を合わせた林業産出額というのは、大体5,000億円ぐらいしか経済的には換算されないんですけど、森の多面的機能は大体年間70兆円ぐらいと言われています。だから、森がなくなってこの機能を代替しようとする70兆円かかる。じゃあ森のままにしておいた方が、すごい見栄えもいいし、いいよねということです。

一方、森を支える林業の動向というのは結構厳しい状況が続いています。昔は木材がすごく需要があって、戦後の高度経済成長期に木材価格が、ヒノキ丸太が7万円とかすごい価格が出ていましたけど、今は値段が下がり国産材は輸入材と同じぐらいの価格です。そういう価格だと、林業をやっても儲からないからみんな諦めて他の仕事に行ってしまう。実際どんどん減って、1980年頃に14万人ぐらいだった林業従事者数は、今はもう3分の1ぐらいの4万4,000人程になっています。

1回ちょっとだけきゅっと従事者数が増えた時期があって、「WOOD JOB!」という映画があって、森林組合で働く伊藤英明が格好よく、山村に長澤まさみがいると信じた人たちが林業に入ったんですけど、「やっぱり長澤まさみはいなかった」と辞めていたりしますね(笑)。4万4,000人なので、東京ドームを木こりだけで満員にできない。でも、2,500万ヘクタール分の仕事量はあるので、どこも人手不足という状況です。もちろん機械化とかをして効率性を上げているので、以前と同じ人数が要するという訳ではないですけども、慢性的に人材不足になっています。

人材不足の一因に非常に危険だというのがあります。山から落ちたり伐採した木の下敷きになったりとか、そんな危険な作業につきたくない。しかも給料も安い。危険できついのにな給料が安かったら行かないですね。この辺りがすごく課題です。

そもそも、何で国産の木がこんなにあるのに使われないかというのを考えると、山は誰かのものなんですね。さっき私有林が6割ぐらいあると言いましたが、誰かの山を他人が勝手に伐れません。山主さんに一応お断りをして、こういうお手入れを一緒にやりませんかとか森林組合が言って、山主さんに代わってやったりするんですけど、10ヘクタール未満の山主さんが多いんです。2,500万ヘクタールある中で10ヘクタールはかなり小規模で、林業で割と家族経営ぐらいで生計を立てている人って100ヘクタール以上ぐらい持っているんです。そういう10ヘクタール未満の人が9割で、その方々に一々、あなたここ伐っていいですか、ここに作業道通し

ていいですかというのは面倒くさいですよ。というのもあって、なかなか国産の山をまとめきれてなくて使えないというのがあります。更に追い打ちをかけるのは、誰が持っている山か分らないというのが3割ぐらいあるんです。空き家問題と一緒にすけれども、林地の場合は地籍調査も入っていないところが多くて、所有者が不明のところが多くなっていますし、気付かず相続されている方とか、もちろんそこには住んでいないので、森がどこにあるか、境界が分からないとか。そうすると、やっぱりトラブルになるから手を出せないんですよ。非常に分散しているということが集約化を阻んでいるということもあります。

林業を産業として回すには木を使う需要がないと駄目ですけど、木材需要はピークよりは減って、毎年8,000万立米から1億立米弱ぐらいあります。そのうちの国産率(自給率)は2002年に最低で18%まで減ったあとV字回復をして、今43%と食料自給率を抜いてはいるんですけど、多くはバイオマス発電所の燃料材として増えたということです。なので、カーボンニュートラルの視点からも家を造ったりして炭素を木材に閉じ込めておくというのが重要で、国内自給率ももうちょっと質のいい上げ方が必要になってくるのかなと思います。ただ、徐々に国内自給率は上がってきているので、もっと国産材を指名買いしていただけるといいなと思っています。

木材が一番使われるのは建築です。3階未満の住宅、一戸建ての家とかだと大体は木でできていて、8割ぐらいは木造住宅になっているんですけど、半分は外国産の木です。国産の木で建ててくださいとか、県産材の木で建ててくださいというふうに施主さんが言わない限りは、大体外国の木が使われます。まだまだ国産材の需要を拡大する余地はあると思います。また、住宅の中でも4階以上のマンションとかアパートはほぼ木が使われていません。建築資材を鉄やコンクリートから木に変えるというように、色々なものを木に変えていくことを「ウッド・チェンジ」と言って今推進しているんですけど、中層住宅はまだウッド・チェンジの余地があります。住宅以外を非住宅といいます。店舗とか役所もそうです。非住宅はまだまだ木造ではないので増やしていくということを進めています。

これだけ山の中に森や木があるけど、どうして使えないんだろうというのは、サプライチェーンにも問題があります。今日は午後山の中に行って、この木が伐られるんだなというのを見てもらいますが、山から伐って市場へ出して、その後、柱や板にひいて、更に加工をして、工事の現場に行って、私たち生活者に届くというの

で、相当長いサプライチェーンがあって、国産材の場合はうまくつながっていないというのが現状です。

ちなみに、輸入材の場合は、船で持ってくるというのは商社が間に入ってコーディネートします。商社というのは大量にあるものを大量に渡すというのが得意ですけど、国内では山の所有者が細分化されています。細分化された小さいやつをまとめて、アマゾンや楽天みたいなサービスがあればいいと思うんだけど、そういうのが林業界にまだなくて、なかなかサプライチェーンがつながっていないのが今の国産材が使われない大きな課題かなと思っています。

木材を使うことで林業とか森の仕事を山村地域に出して森を維持していくことが求められています。林野庁が100年後の望ましい森の姿を示しています。現状は、育成単層林といってスギとかヒノキを1種類だけ植えている、いわば木の畑が1,010万haあります。そういう森は生物多様性が低いし、スギが駄目になったときにレジリエンスがないから、森で働く人もいないし、将来的には660万haに減らして、残りの育成単層林は時間とお金を余りかけずに、育成複層林と言いますけど、針葉樹と広葉樹が交じる天然で更新していくような森に誘導し100年後に全国で合計680万haに増やそうというものです。それを計画制度として全国計画に目標を書いて、それを都道府県の計画、市町村の計画、地域の経営計画へと徐々にブレイクダウンして実施するという考えです。やっぱり森って百年の計なので、計画制度がすごく大事です。ただ、全体像はあるけど、地域でそれをどういうふうにやっていくかというのは、割と県とか市町村にお任せということになっている。森は山村にあると言っても過言ではないですけど、山村に住んでいる人は人口の2.5%しかいない上に、高齢化と過疎化が進み山の人だけでは山を維持できないというのが現状です。特に木材を売る林業、今の丸太の価格だけでは、伐ってもまた植えて育てるというのができない。補助金もありますが、補助金を入れても赤字。赤字だったら何も伐らないという悪循環に陥っているというのが今の林業です。それをどうしたらいいかというのを研修期間中に班別で考えてもらい最終日に全体討議で議論しようということにしています。

日本人は森の国で暮らしてきたというふうに思っています。だけど、過去の歴史を見ると、飛鳥時代は寺を造り、安土桃山時代は城を造り、江戸時代は人口が増えて町屋を造りエネルギーのために裏山から薪を取っていました。実は私たちは知らないだけで、過去にはハゲ山が広がっていて、すごい土砂災害とかが起きていまし

た。今のような森林が広がっているのは先人のお陰ですが、400年ぶりぐらいらしいです。江戸時代ぐらいから伐った後に植林することが本格的に始まったというふうに言われていまして、過去を見ると、あればあるだけ使っちゃう民族じゃないかという懸念があります。ちょっと手入れ不足の森が多くなっていることも否めないですけど、それを先人から引き継いで、次の世代にちゃんと豊かなまま引き継げるかというのは、歴史上にない挑戦です。だから、今やらなくちゃいけない、できるかなということですね。

実はハゲ山の兆しがでてきているんですね。伐った後、木材が安いから、再造林するお金が出ないので、伐った後、植えられているのは3から4割ぐらいで7割ぐらいは放置。里山も薪の需要とかがないから大体手入れ不足。我々はちゃんと豊かな森を次に残せるのか、またハゲ山にしちゃうのかというような試金石が今来ているんじゃないかなと思っています。みんなで森を諦めないで、何とかお手入れをしながらうまく経済を回して、人手も確保できたらいいなと思ってモリアゲの仕事をしています。

【森と木の可能性】

いままで課題ばかりお話ししましたが、これからの時代は森と木の可能性に満ちているという話をしていきたいと思います。地球で暮らせる環境収容力はどんどん悪化しています。ほぼ人間のせいというのが今の科学の答えですけど、人類が自然に負荷をかけて、本来、自然の一部として人類も生きているはずなのに、いろんな生き物を絶滅させて、そして環境を悪くして生きている。SDGsに経済とか社会の目標があるけど、その土台には自然環境とか生態系というのがあるので、こっちがうまく回っていないと、結局人類も、本当は自然の一部なので、うまくいかない。

経済活動、農林水産業はもちろん、いろんな企業もサプライチェーンをたどっていけば、自然資本に大きく依存しているのに、どんどん劣化している。最近では、今までの自然に依存した産業ではなく、自然を再生する産業にビジネスチャンスが広がっていると言われてい

ます。CO₂をなるべく減らそうという技術開発を企業もやっていますけど、経済活動をする限りどうしてもCO₂が出てしまいます。排出するCO₂と吸収するCO₂をプラスマイナスゼロにするというのがカーボンニュートラルで、森林がCO₂を吸収する能力が非常に大事だと言われ

ています。CO₂吸収で見た場合は、木の大きさがCO₂吸収量と思って問題ないのですが、木を燃やすと吸収されたCO₂が大気中に放出されてしまいます。なので、人工林も主伐といって建築とかに使うために伐採して、伐採した木材を家とか家具とかに利用して炭素を固定して、伐採した後に新しい木を植える（再造林する）と植林した若木がCO₂を吸って成長する、というのが今のカーボンニュートラルの森のロジックになっています。国内の林業を盛んにして、適切に木材を利用したり、森の手入れをしたりすることのニーズが上がってきているということです。

経済産業省、環境省、農林水産省が共同でCO₂を吸収する機能をクレジットという形で認定する「J-クレジット」という制度があります。例えば、化石燃料で発電していたものを風力発電に代えたら、その分CO₂が減るので、それを誰かに売れますよというものです。森も丁寧にお手入れをしているとCO₂を吸収するので、その量が認定をされて、いろいろな企業に買っていただいています。これまでCO₂の吸収機能とかというものは、なかなか経済価値には認められてこなかったのが、こういう制度で経済的にもお金が回って、このクレジットを売れば、CO₂を吸収した森の機能にお金がいただけるので、それをまた再造林とかお手入れに回せるようになるというのが進んできています。

建物を建てるときできるだけ木で造りましょうという通称「都市の木造化推進法」を議員立法で改正していただき、木造化を推進する対象が公共建築物から民間の建物にも拡大されました。ちなみに「木の日」は10月8日です。木という漢字が十と八で出来ているので10月8日。この日を法改正で「木材利用推進の日」としていただきました。こういう運動も含めて木材を使いやすい社会を、法に基づき創設された「建築物木材利用推進協定」等の仕組み等を活用して推進しています。

ばらばらに存在する森、所有者が手入れの出来ない森、そういうものを一度市町村でまとめて、林地バンクみたいな感じで経営をまとめて、地域の担い手がまとめて施業ができるようにする仕組みとして「森林経営管理制度」が2019年から開始されています。さらに、2026年4月から市町村の事務を応援する団体を指定する仕組みとか、市町村の事務を円滑化するような仕組みというのも予定されているので、より集約的な林業が進んでいくかなと思っています。

「森林環境税」が令和6年から施行され毎年1,000円ずつ徴収されていますけど、実は令和元年から前借りして自治体には配られておりまして、市町村で間伐をした

り、木こりを育成したり、木材利用に使ったりということで、森林整備につながることは森の独自財源ということで600億円ぐらい全国の市町村に配られています。こういった後押しもあり、いろんな地域の森の整備を、地域の実情に応じてできる財源的な措置も進んでいます。

カーボンの次はネイチャーと言われています。今は第6の大量絶滅期とも言われ生き物がどんどん絶滅しています。人類だけでは実際に生きていけないですから、いろんな生き物が一緒に仲良く暮らすのが大事ですけど、こういう生物多様性というようなことも今すごく注目をされていて、カーボンだけでなくネイチャーもポジティブにしていこうという動きがあります。

2050年に自然と共生する社会を創るには、自然を破壊しないという消極的なことだけでなく、積極的に自然を回復、再生させ、人類の生存を確固たるものにする必要があるのでないかということで、2030年までに生物多様性の損失を止め回復軌道に乗せるという「ネイチャーポジティブ」という国際的な目標があります。

カーボンニュートラルの達成のためのクレジット制度が経済的な行為になり、カーボンをどれくらい出しているかというのを財務諸表なんかでも非財務情報ということで開示するようなことが日本でも義務化されていますけど、生物多様性についても企業が経済活動で自然に対して何をやっているのか、何をやっていないのかを開示するというのが世界では進んでいます。日本でも「TNFD (Taskforce on Nature-related Financial Disclosures)」という国際的な枠組みを企業が先行的に取り組むようになってきますけれども、イギリスではデベロッパーが大規模な建築プロジェクトに着手する際は少なくとも生物多様性を10%増加させるよう義務づける法律があります。仮に自分たちができなければ、ネイチャークレジットを購入する必要があります。今後、国内でも検討されると期待していますが、ネイチャーというのも経済的な価値に入れて、人類の活動をより自然に優しいものにしていこうという流れがあります。国際的には大企業、例えばApple社が2億ドルの森林再生基金を創設するなどの動きがあります。

一方、「30by30」(サーティ・バイ・サーティ)という、2030年までに30%以上の陸と海を健全な生態系として保全するという国際的な目標があります。日本では国立公園とか制度的に守られている面積は20%しかないで、残りの10%を民間の取組、例えば工場の社有林とかNPOの人たちがやっているビオトープとかを「自然共生サイト」として認定して積み上げ、保護区域との重複を除いた区域を「OECM (Other Effective

area-based Conservation Measures)」として登録し国際的な目標を達成しようという仕組みがあり、それを法定化したのが「地域生物多様性増進法」です。現在までに400か所以上が自然共生サイトに認定されています。

例えば、トヨタ自動車のかつての里山地域を保全した「トヨタの森」、キリンホールディングスの下草を残し管理し草原生態系を代替するブドウ農園「シャトー・メルシャン 梶木^{まりこ}ヴィンヤード」があります。自然と調和した形での経済活動をするという、企業のイメージにもいいですし、こういうお墨付きを環境省からももらえるということもあって、今増えてきています。

何で森が大事かというと、陸の生き物の8割は森に住んでいるからです。実際、自然共生サイトに多くの森が認定されています。なので、スギを植えて、放っておくと下に草も生えず虫もないようなところになりますけど、ちゃんと間伐をして、下草を生やしたり、いろんな木が交じるようにしたりするといい森になっていきます。こういう林業をしながら生物多様性を高めるということも林野庁としてはチャレンジをしています。こういう自然の価値であるとか、人が手を入れたときにどういうふうに変化していくかということをちゃんとチェックできれば、企業の投資対象にもなっていくのかなと思っています。

水源も森があることでハゲ山のときよりも、これぐらい水が涵養されるというのを、簡易な形で定量化できる手法もできてきています。生物多様性も大学発のベンチャーがマップに落として、自分たちの地域の生物多様性がどうなっているか見えるようにしていますし、研究が進んで森があった方がレッドリスト（絶滅のおそれのある野生生物の種をリスト化したもの）掲載種の種数が多いということがわかってきています。また、上流の自然豊かな森を水源にして、水は川を流れ、里を通り海の生物多様性にも影響を与える。これは科学的に証明されています。

なので、森に対して、これまでは5,000億円ぐらいの生産額しかなかったのが、炭素の価値も出るし、ネイチャーの価値も出るし、水源涵養の価値というのも、数値的に表せるようになってきている。数値で表せると企業が投資をしやすくなる、民間のお金が入りやすくなるのかなと思っています。

私が森に期待している機能として、人生100年時代というのをすごく意識するんですけど、何をするにも健康が大事です。生涯現役で働いてほしい、社会保障費を減らしたいという国の意向はあると思いますけれども、とにかく健康じゃないと幸せじゃないんですよ。働いてい

るときから常に健康を意識してやっていく必要があるし、企業も今、企業の人的資本経営とか言っていますけれども、企業の業績を考えると、ビジョンを作るとか、いろんなイノベーションとかありますけど、それを支えるのは人なんですよ。とにかく健康経営、企業も人的資本投資と言っているようなこともあって、企業の財産である人が健康で働けるために企業も投資していくよというのが世の中の流れにだんだんできています。

一方で心が不調な人が増加をしているんですよ。これはいろんな原因が複雑に絡まっているとは思いますが、一つ私が思うのは、やっぱり森に行かないからじゃないか。すごく我田引水なんですけど、特に都会の人。世論調査だと、この1年間に森に行かなかった人が半分ぐらいいるんですよ。さらに、東京23区では3人に1人しか行かない。3人に2人は行かないということなんです。

心身のリフレッシュや健康増進のために森に行くのが森林浴です。ちなみに「森林浴」という言葉、1982年の林野庁の長官が提唱した、日本発祥の言葉なんです。この「森林浴」「Shinrin-yoku」というのでハッシュタグで調べると、いっぱい出てきて、外国の森ばかりなんです。日本で発祥したのに、お株を奪われているんです。なので、日本で森林浴ができる森とか外国語が通じる森とかが増えると、更にインバウンドが増えるんじゃないかなと思っています。お疲れサラリーマンに長野県の森の中で2泊3日過ごしていただいたら免疫細胞と言われるNK細胞が、2日で5割活性化したという報告があります。あと、ストレスが減るとか血圧が下がるという結果も出ています。森林浴をもっと流行らせた方がいいんじゃないかなと思います。

自然空間にいと、心理的なリラックス効果だとか、抑鬱効果があるというエビデンスが蓄積されてきています。なので、森だけじゃなくて公園とかでもいいですよ。緑ですよ。私たちの人類としての生物学的な体というのは、この情報社会に対応できるほど脳がまだ進化していないんですよ。こんな時代、人類の歴史からすると本当の最後の1秒ぐらいで起きていて、すごいスピードで起きている。だからみんな疲れちゃうんですよ。皆さん、疲れたら自然に触れる。我々は自然の中でうまく体がチューニングできるようにできているので、ちょっと期待を持て^{もりぎょう}いまして、森を人間性回復の場所として位置付けて、「森業」と言って山村地域に行つてねというのを農林水産省でやっていますけれども、森を、例えば企業のチームビルディングとか企業理念を浸

持続可能な社会に向けて森林で同時達成 **モリアゲ**



透させるようなものを森でやるとか、健康経営に森を生かす、いろんな形での山の地方創生というのをできればいいなと言っています。

縷々言いましたけど、持続可能な社会に向けて地域で暮らしていくためにやらなくちゃいけない、カーボンニュートラルとかサーキュラーエコノミーとかネイチャーポジティブとかウェルビーイングとかいうのも、実は森をちゃんとして、もう一回付き合い方を改善していけば、全部一気に達成できるんじゃないかというのがモリアゲの主張です。こういう森と木に対する追い風が吹いているので今生かさない手はないし、森に関して関心のある人が少ないので、その辺を盛り上げて、もっとこの追い風に乗って日本の森に人手が入ったり、山村地域に人が通ったりするような、そんな世の中になるといいなと思っています。

【各地で始まっているウッド・チェンジ】

これまで課題はあるけど、可能性も追い風もありますよという話をしました。実際に、そういう追い風を踏まえて各地で面白い事例が始まっています。以下、「ウッド・チェンジ」をはじめ具体例を少し紹介して、最後に私が各地でやっている「モリアゲ活動」を紹介して、政策課題の具体化につなげてもらったらと思います。

<建物のウッド・チェンジ>

先ほどもお話ししましたが、非住宅をウッド・チェンジしていくというのがあります。お店に行っても、この建物は木なのかそうでないのかというのは分からないんですけど、最近はマクドナルドが2階建ても含めて新しく建てる店舗の多くを木造で造っていただいています。鉄骨が高くなり過ぎて、木の方が安いということもあるそうですが、できるだけ地域の木を使おうということで、マクドナルドは150店舗ぐらい木造を造ると仰っていただいています。セブンイレブンも毎年25店舗ぐ

らい新しく出店する際は地域の木で造ってほしいと仰っていただいています。

他にも無印良品の郊外にある店舗で使っていただいていますし、自動車のオートボックスも、今、木で割と木の倉庫とかも造りやすくなってきているので、それを造っていただいています。

さらに、技術も進んできていてビルも木で建てられるようになってきています。タマディックというロケットや車とかのエンジニアリングをしている会社の名古屋支社は、社長がサウナ大好きで、最上階にサウナまであります。社長いわく、北欧で木の格好いいビルがいっぱい建っていて、すごい格好いい街並みなんだけど、なぜ日本でできないのか、じゃあ自社ビルでやって見よう、自社ビルなので社員が喜んでもらうのがすごく大事だということで、社員のウェルビーイングのためにサウナも作って、社長と入れるサウナは結構人気を博しているそうです。最近、職場を選ぶときに職場環境を見る人も増えていて、特に女性社員は格好いいビルに入れて嬉しいとか。

鉄骨とかに比べるとお金は掛かるけど、社長さんいわく、やっぱり宣伝にもなる。すごいテレビとかに出たりしているんですよね。社員さんが、ここで働いて、木質の空間なので、非常にリラックスムードも広がっているみたいで、評判が減ったと言っていました。こういう木と直接関係のない人たちも木を使うということが始まっています。

<自然の中でウッド・チェンジ>

「SANU 2nd Home」という別荘のサブスクリプションのサービスがあります。白樺湖とか北軽井沢とか風光明媚な場所にあって、コロナのときにサービスインしたこともあって5,000人ぐらい会員待ちになったということです。SANUでは、できるだけ地域の木を使いながら、例えば悪くなった部分だけ少し替えるような、部材をITで管理をして、地元の工務店でも取り替えられるような、そういう循環する方法をしてみたり、実際、ここで使った木の分は、ちゃんとSANUの社員みんなが植林をしてくれたりするので、こういうキャビンが増えれば増えるほど森がよくなるというか、そういうサービスとして売っている。それに共鳴する、Z世代の人もそうなのかもしれないけど、若い人たち、特に自然の中で家族と暮らしたい、たまにはこういうところでゆっくりしたいという人たちにウケているということです。

＜内装のウッド・チェンジ＞

建築自体に木材が使えなくても内装に本当の木を使ってもいいと思っています。最近、写真とかプリントの技術が上がって精巧なプリントもありますが、本当の木の方が調湿効果という湿度を一定にする効果もあるし、音の滑らかさや木の香りとともあるので、本当の木の方を使ってもらいたい。対照実験もあって、やっぱり木を使っているところに吸い寄せられて、お客さんは木を見てこの店に入りたくなったということなので、やっぱり人類は森から生まれましたから引き寄せられるのかなと思います。

高齢者施設でも、おばあちゃんたちの行動量が木質のお部屋の方が上がったり、転んでも骨折しにくいというのがあったりしているので、内装のウッド・チェンジを積極的にしてもらったらいなと思っています。

＜ウッド・チェンジで脱プラ＞

化石燃料の利用も減らしていかなきゃいけないけど、プラスチックに木屑を混ぜるとか、木そのものからプラスチック代替材料を作るとかも進められています。着るものも、関西万博では医療用のスタッフユニフォームに木糸という国産の間伐材を使った糸を材料にした布を使っていたということで、Tシャツを作ることもなどにも広がっています。

＜お酒もウッド・チェンジ＞

お酒が好きな研究者が木のお酒を創りました。樽で熟成することじゃなくて、木そのものを特殊なミキサーで分解し発酵させると、木のそのものの香りが残るお酒になるそうです。森林総合研究所というところでその技術を開発したんですけど、それをエシカルスピリッツという会社が茨城県の廃校に蒸留所を造って木の酒を造るプロジェクトを進めています。この木のお酒、メソポタミア以来のアルコールの新種ではないかと言っていました。桜とか白樺とか割と美味しいそうで、味のいいブレンドをやって、地域の組合せで美味しいお酒ができたりするとまた夢が広がるなというふうに思っています。

＜ウッド・チェンジできる新素材＞

日本製紙がチャレンジしてまして、木材の繊維を微粉砕しナノ化したcellenpiaという最先端のバイオマス素材を開発されています。様々な用途が期待されているようですが、食品添加物として、例えば、どら焼きの皮がふわふわになるとか、ゼリーがツルンツルンになるとかプルンプルンになるとか、あとは化粧品なんかを使う

と、すごい滑らかでツルンツルンになるよという。紙の使用がどんどん減っているものですから、日本製紙はこういう新しいビジネスをやってくれています。

＜連携してウッド・チェンジ＞

ここからは制度や協定などの仕組みで関係者が連携してウッド・チェンジをする取組を見ていきたいと思います。東京23区で一番CO₂を出しているのは港区だそうです。港区は延べ床面積5,000平米以上の建物を建てるときは、「国産木材使用計画書」を出しましょうという「みなとモデル二酸化炭素固定制度認証制度」をやっています。港区には森がないので、全国82の自治体と協定を結んで、その協定を結んだ自治体の木を港区で建物として使うという制度です。その木を使うことで各施設がどれだけCO₂を固定しているかを港区が認証しています。

そもそも、山をやる人たちの給料が高くないといけません。サプライチェーン全体でちゃんとお金が返る、そして再造林がされるということを考える必要があるんです。大分県にある佐伯市、佐伯広域森林組合、ウイングという木材の2×4（ツーバイフォー）工法の会社そしてウッドステーションという大型木材パネルの製造から納品を行う会社による再造林を担保する木材利用促進協定があります。ウイングは、佐伯広域森林組合が再造林できる価格で毎年年間1万立米以上買いますよということを協定している。普通の市価よりも大分高い価格ですがウイングとしても自分たちが関わる建築で山がはげになったら格好悪いですよ。だから、再造林100%の木材を使う。価格は高くはなりますが、適正な価格で売るということをやって、協定を結んでいるんです。

その結果、この佐伯広域森林組合はハローワークに求人を出さなくても若い人が来ていて、人によりますけれど、この森林組合の伐採する人たちは、年収1,000万円を超えている。ちゃんと適正価格で川下が考えて、川上にお金を戻してあげられれば、山の仕事ができて、そしてそこで働く人たちは1,000万円もらえるから、いい車に乗って山に行くから、ハローワークで求人しなくても、森林組合で働くとお金もうかるらしい、ということでどんどん人が来るという好循環につながって、サプライチェーン全体で解決していくということが始まっています。

野村不動産ホールディングスは、東京の奥多摩町の立木の使用权を30年間契約して、森林でCO₂を吸収しますとか、自分たちが東京で造るオフィスとかマンション

に奥多摩の木を使うとか、地域の製材所でちゃんと川上・川中・川下と連携してサプライチェーンを作っていくとかという取組をされています。

再造林は、本来、山主さんの義務なんですね。でも、木材が安過ぎて再造林するお金が山主さんに戻らない。だから、高く買うというのがさっきのウッドステーションとウイングの事例ですけど、製品を高くは買えないけど利益の一部を寄付金として再造林に協力するというのをタマホームや新栄合板工業が行っています。大分県や大分県森林再生機構と協定を結び寄付金を県に納め、林業や木材産業の関係者からも協力金をいただき、それらのお金を集めて再生機構が基金を創って、再造林の支援をしています。

宮崎県は32年連続スギ生産日本一と頑張っているんですけども、再造林されないということが課題でした。70%ぐらいは植えられているんですけど、まだまだ増えそうだったので、これに関する再造林条例というのを作って、みんなで再造林していこうよという機運を高めていたりします。

大分県で鎌倉時代から森と向き合ってきた田島山業は約1,200ヘクタールの山を運営されているんですけど、LINEヤフーと森林由来のJ-クレジットを毎年CO₂換算で1,500トン取引する10年間の契約を結んでいます。これは、森林があることや森林を育てることに経済価値が認められた素晴らしい例です。

ソフトバンクは、企業版ふるさと納税制度を活用して47道府県市に40億円を寄附し、2040年までの15年間の森林保全活動をされています。こういう企業版ふるさと納税は税率などで企業側のメリットもある訳です。

これまでスギやヒノキの話はずっとしてきましたけど、日本の森の6割は広葉樹です。ナラとかケヤキとかクヌギとか桜とかが生えています。広葉樹も使っていこうというので、岐阜県の飛騨市は広葉樹で建物を建てたり、森と連動して新しい製材所を動かしたり、新しいというか止まっていた製材所ですね、広葉樹をひくために再稼働するといったようなことも広げています。

広葉樹は普通の針葉樹より固くて主に家具とかに使うんです。これまで北海道では、海外の家具材に押されて北海道産材がすごく少なかったんですけど、北海道は森林資源の半分ぐらいが広葉樹なので、自分の地域の木で造ろうじゃないかと、旭川家具工業協同組合の家具屋さんたちが「ここの木の家具 北海道プロジェクト」というのを立ち上げてやったら、10年で8割ぐらいの家具を北海道産の広葉樹にすることができたということです。みんなでこういうふうな目的を持ってやれば、ちゃんと

できるということですね。

デジタル技術は林業と遠いような気もするけど、意外に親和性も高く、VUILDというデジタルファブリケーション（デジタルデータを基に創造物を創作する技術）のベンチャーは、もともと家具を自分の建物の使いたい場所の寸法に合わせてネット上でデータを入れて、そのデータを入れたら、そのデータどおり切られた家具のパーツが送られてきて自分でつけるという、サービスをしていました。最近、家具だけでは飽き足らず、家なんかを自分で建てる人たちへのサービスも提供しています。この会社は、ShopBotという材をコンピュータの製図どおりに切ってくれる機械の代理店をしていて、全国に100か所以上入ってまして、地域材をそこの場で加工して作れるようになりました。

そもそも再造林する人がいないんですよね。再造林をした後に木が育つように草を刈ったりするんですが、夏の暑いときにやるから重労働で結構辞めちゃうんですよね。最近、造林・育林という森をつくる専門のベンチャー「青葉組」というんですけど、そういう人たちが出てきて、若い人ばかりでやっていて、彼らのポイントは、3日働いて1日休む。その3日働くときも、午前中しか働かない。山の中に行くんだけど、非常に重労働なので、朝から昼まで働いて、午後は自分の好きなことに使っている。造林をする箇所ってすごい山の中だったりするんだけど、若い人が来てくれて、ホワイトでもブラックでもブルーでもないグリーンなワークスタイルということで、未来の森を今つくるというところに共鳴した若者たちや、自然にまみれて働きたいという人たちが意外にいて、雇う方もLINEで今日は行かないというのはオーケーしているとか言っていましたけど、若い人たちの働き方に合わせてやってあげると、地域にこういう仕事というのが出てくるのかなと思ったりします。

ソマノベースという会社を若い女の子たちがやっているんですけど、どんぐりって広葉樹のナラとか樫とかの実なんですけど、育つのにすごい時間かかるんですよ。なので、広葉樹の苗木は生産が全然足りなくて、消費者の皆さんにも苗木を育てるのに参加してもらおうと。インテリアで観葉植物を育てるんだったら、苗木でもいいよねというので、MODRINAEというサービスをやっています。1万2,000円を払うと、どんぐりが5個送られてきて、それを2年間育てて山に返すという。これは物を売っているんじゃないで、ストーリーとサービスを売っているんですということを言っていましたけれども、今これが、すごく流行って、消費者だけでなく、企業もオフィスで、どうせ観葉植物を育てるんだっ

たら、苗木を育てて、みんなで植えに行こうということで、50社以上に導入されています。

ソマノベースは和歌山の会社ですが、JR西日本が和歌山県内の特急「くろしお」が止まる駅で、駅員さんたちが備長炭の基になるウバメガシの木を、どんぐりから育ててくれているということです。だから、林業もいろんな形での関わり合い方というのがあって、それをうまくつなげてあげると、こういう素敵なサービスになるのかなと思うんです。

今、炭も結構輸入しているんですよ。バーベキューの炭とか、焼鳥屋さんが使っている備長炭みたいなものですね。「四国の右下木の会社」という、ITベンチャーやまちづくりをやっている吉田さんというスーパーマンが起業された会社です。炭焼きって何となく結構古いイメージがあって、すごい重労働、煙が消えるまで一睡もできないみたいなイメージがあるんですけど、ITで炭窯を管理して誰でもできるようにして、徳島県の会社ですけど、ここの木を伐ったりする人、みんな未経験者で、そういうことをやっています。だから、いろいろな方が林業に入って、炭焼きができるような、何かそういう横展開ができやすいようなことをされています。

サントリーの経営基盤は水とか大地ということで、健全な水環境を維持するというのも会社の中でも本業の中で一緒にやっていくということで、「水と生きる」というタグラインなんかもありますけれども、社員もみんな必ず森へ研修に行きます。全国の「天然水の森」を整備してくれていますね。多くは国有林だったり地方の自治体有林であったりしますんですけど、経営基盤で大事だからということでお金を出してくださる。

三菱地所が群馬県のみなみ町でやっている事例ですけど、イヌワシという生態系の頂点に立つ非常に大きい鳥が日本でどんどん減っているんです。イヌワシは飛びながら餌を探しますが、針葉樹を密に植えると餌となるウサギとかヘビが見えないんです。餌がとれないと産卵が少なくなって数が減ります。そこでイヌワシが餌を見つけられるように木を伐ってあげようということを20年来やっているんですけど、その活動とか人工林を天然林に戻していこうというような活動を三菱地所が企業版ふるさと納税で、10年間で6億円の寄付を予定しています。ネイチャーポジティブに今、企業で関心が高い方がいらっしゃるの、そういう人たちとマッチングをしていけているのかなというふうに思います。

TOPPANグループ健康保険組合、昔の凸版印刷の健康保険組合ですね。企業の健保、結構赤字と聞きます。なので、社員が元気になれば医療保険、健保も支出が少

なくなるというので、TOPPANグループの社員さんが森林セラピーとか森の中に行ったときに、そのセラピー代を出してくれるというようなことを始めています。今日、皆さんにも森の中でチームビルディングとかしていただきますが、ストレス耐性もつくんじゃないかと思います。

そもそも山村地域に人が住まなくなっているのが課題で、林業で木を伐って売るとするのは50年に1回しか収入がないですけど、森林サービス産業といって、森は育てている間にも経常的にお金が入ってくるように、もっと違う森のつくり方をしてプログラムができるような空間利用をする。そしてウェルビーイングなんかに貢献できることを推進していくといいねと言っていたりして、企業に期待をしています。

こんな感じで、林業もちろん主要である木材を高く売るなり、そういう活動もやられていますけれども、それ以外の「森業」といったところもだんだん方向が見えてきて、これからやらなくちゃいけない、やり放題というか、あんまりやる人がいないものですから、これは盛り上げていきたいということでやっています。

【モリアゲ活動】

最後になりますが、ここから私のモリアゲ活動を少しお話したいと思います。さっき森の多面的機能は70兆円あると言った中で、これまでは経済価値になっている

森の恵みの価値化と森林業モリアゲ

年間70兆円超

物質生産
木材やきのこの生産の場になる

生物多様性
いろいろな動物のすみかになる

地球環境保全
地球温暖化を防ぐ
1ha4652億円/1年

自然災害防止・土壌保全
山が崩れるのを防ぐ
365ha998億円/1年

水源涵養
水を貯え、きれいにする
29ha8454億円/1年

快適環境形成
空気をきれいにし、生活環境を快適にする

景観・レクリエーション
レクリエーションの場になる
2ha2544億円/1年

文化
文化・景観を形づくる

◆ カーボンニュートラル（クレジット、一社一山、森林ファンド）

◆ サークュラーエコノミー（ウッド・チェンジ、グリーンウッド、再造林担保、3R）

◆ ネイチャーポジティブ（自然共生サイト、地域循環共生圏）

◆ レジリエンス・水循環（流域連携、ソーシャルインパクトボンド、グリーンインフラ）

◆ ウェルビーイング（森林浴、健康/人的資本経営、一社一山、SBNR）

◆ 森林文化継承（里山再生）

◆ 森育・木育（学校林、木育トラック）

森林業でモリアゲよう！

モリアゲ活動

(2022.8~2025.11)

◆ 講演・セミナー登壇

- 42道府県
- 自治体・団体・企業研修

◆ 自治体アドバイザー
(岡崎市、高山市、阿久根市)

◆ 検討会委員

◆ 企業コンサル

◆ 団体顧問・理事

◆ 木材コーディネーター

◆ 森林浴アシリエーター

モリアゲ

モリアゲ

のは物質生産のところだけだと言いましたけど、クレジットであるとかネイチャーであるとか、水の涵養とか、こういうのもいろいろと価値化ができてきていると思うんです。それをうまく森側からも説明をして、それに対して投資してくれる人とうまくつないでやっていく。これを、林業を含めて「森林業」と言っていますけど、そういう全体で盛り上げていけないかなというふうに思っています。

そもそも人工林が成熟していますから、木をちゃんと使うことで、森と街をもう一度つなぎ直すということが大事じゃないかなと思っています。例えば富山県はウッド・チェンジ協議会というのを立ち上げています。私は協議会のアドバイザーをやっています、川上から川下までのプレーヤーの皆さんを集めて、そこでみんなで植樹をしたり、いろんな木造施設を見学に行ったり、家を建てる施主さんに木を使ってもらうとかサプライチェーンを作ったりということをお伝えしたりしています。

私は愛知県出身なんですけど、市町村は非常に忙しいので、岡崎市では市役所と森林組合と地元の企業が出資をして「株式会社もりまち」という地域商社を作っています。森の窓口をここに全部寄せて、市役所、森林組合、市内外の関係者とも連携をしてやっていくということを応援しています。先週もやっていたんですけど、岡崎市は矢作川という流域なんですけど、市町村単位だとちょっと小さくて、流域ぐらいでやると、人が少ない中ではより効率的かなと思うんですけど、流域に似合うベンチデザインコンペとか、そんなことをやっています。

街で暮らしていると、森とのつながりというのはほぼ意識しないで生きている。特に都会で暮らす人が多くなって、そういうのが結構課題かなと思って、やっぱり森と運命共同体になる、流域運命共同体になるような人たちを増やしていきたいなと思っています。今、木材コーディネーターという、今日の午後行く森も木材コーディネーター仲間の人の森ですけども、地域のサプライチェーンの間をうまくつなぐ人たちというのを一緒に盛り上げたりしています。

高知県の土佐町と本山町にまたがる早明浦ダムというダムがあるんですね。その水は県を越えて香川県の高松市が使っているんですけど、山が荒れると水も不安定になるということが最近のベンチャーのシミュレーションなんかで分かってきていますから、これを3市町がお金を出して一般財団法人を作って、中間支援組織としてソーシャルインパクトボンドみたいな挑戦を始めています。

群馬県のみなかみ町と同じように、山形県の金山町で

は、イヌワシとクマタカという大形の鳥がいるので、これをうまくつないで、そしてイヌワシが育む木材を高く売るということでビジネスが回るような仕組みを環境省などと一緒にやっています。

次は森と海は恋人という事例です。鹿児島県阿久根市はタケノコの街だったんですけど、掘らなくなって竹がボウボウになって、西日本はすごい竹が課題なんです。一方、海では磯焼けでイカの卵を産む海藻がなくなって漁獲量が落ちていました。その竹を取ってきて、縛って海に沈めるとイカが卵を産むということで、イカを増やすために山と海をつないで市や漁協の皆さんと一緒にやっています。こういう流域全体のつながりが、全国でできるいいなと思っています。

誰がお金を出すと取組が進むのかというのがすごく難しく、昔は地元の名士が、地域の山をちゃんと維持しようというのでお金を出してくれました。最近お金があるのは企業と思っています。2023年の企業の利益剰余金は670兆円もあるんですね。国家予算より多いです。ちょっと森に恩返ししてくれてもいいんじゃないかなと思っています。もちろん社有林を持っていたら一番有り難いんですけど、ネーミングライツで企業の森にして皆さんで活動していただいたり、企業販ふるさと納税でもいいですし、クレジットを買ってもらってもいいし、自然共生サイトを応援してもらってもいいし、森林浴で企業研修をしてもらったり、地域の木をオフィスに使ってもらおうといったようなこともできるのかなと思っていて、「一社一山」ということで企業の皆さんに提唱しています。

モリアゲの第1弾は、長野県の本島平村というところでやっています。もともとあったブナ林を伐って牧草地にしたんですけど、牛がいなくなって、そのまま放置されて森に戻らないというところを、ブナ林を再生するという活動を3年前からやっています。村の人たちも受入体制が万全で、最近、姉妹都市の調布市の人たちも一緒に来て植えたり、ソフトバンクの人たちも一緒に来て植

一社一山で自分事化



えたり、もともと伊藤忠建材が10年以上この活動をやられていて、横のつながりはどんどん広まっていて楽しいなという感じでやっています。

私はワタミの公益財団法人 SEF (Save Earth Foundation) で顧問をやっています。岩手県の陸前高田市での森づくりに関する協定を市や企業と結びました。企業に毎年50万円ずつ森づくりに払っていただいて、一区画ずつ割り当てて、とにかく1年に1回は陸前高田に来てくれということで、みんなで森に来て、森でいい汗を流そうというようなことを始めています。ニッスイやローソンが参加されています。「ローソンが何で森？」という感じが知り聞いたら、やっぱりコンビニっていろんな地域にあるから地域貢献をしたい。地域の皆さんが困っていることを何とかしたいというのは最近の企業のニーズだったりするので、やっぱり森はみんな困っていますから、こうやっていい受け皿を自治体でつくっていただけると、企業もお金を出しやすいのかなと思います。

私の地元に愛知県の海上の森という愛知万博のときに会場になった森があるんですけど、中京テレビがその一区画を「アプデの森」と名付け、林修先生が番組をやっているんです。是非、「森でしょう」と言ってもらいたいんですけど、まだ言ってもらえていないんです。そういう番組とも連動していて、今、スポンサーさんもついて、みんなで森づくりをしています。

広葉樹をモリアゲようということで、いろんな広葉樹に関わる人たちが横でつながるサミットをやってみたり、森林浴をモリアゲようということで、森林浴のファシリテーターを養成するお手伝いをしたり、外国の人がShinrin-yoku (森林浴) をしたいと日本に来るので、その人たちをどうやったらこれから広げていけるかというようなことも考えています。

「も」が付く森に関わる3社、「森と未来」と「more trees」と「モリアゲ」で、「ももも」と呼んでいますけど、「企業による森林サービスを活用した新たな価値づくりプロジェクト (愛称 ももも)」を立ち上げています。企業がサービスをするときの価値というものをちゃんと上司に説明できるようにしなきゃいけないんですが、そういうものを企業と一緒に作るということを進めています。

最後に、森に入る機会のモリアゲ活動を紹介します。最近、チェーンソーを始めました。めっちゃ爽快です。自分の育ってきたよりも長く生きてきた木を伐ってしまうというのは少し心が痛いけれども、すごく爽快な気持ちになります。岡山県のベンチャーで有名な西栗倉村

森に入る機会のモリアゲ

モリアゲ



107

で、3日間で「チェーンソーによる伐木等特別教育」という資格を取らせてくれて、木を切り倒させてくれるというツアーをやっていて、私も参加しました。正に森業の新しい展開かなと思ったりします。

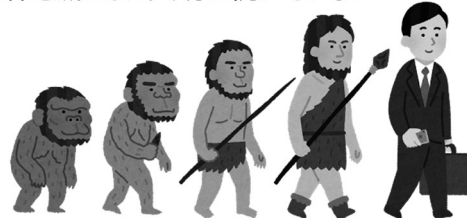
森には色々な産物があるんですね。今、私が集めているのはマタタビです。いわゆる猫にマタタビです。いなばの子会社でペットフードを扱うスマックという会社が国産のマタタビが欲しいということで、今、「日本草木研究所」と一緒に全国でマタタビを集めて、山採りで集めると全然足りないの、今年から山で日本版アグロフォレストリーみたいな感じで栽培できたらいいなということをやっています。

我々の脳味噌は急速に発達した情報化社会にまだ対応していないから、森から生まれた人類としては、森を滅ぼさないように、いかにうまく文明を導いていくかということもやっていかなくちゃいけないし、モリアゲも一人100歩ぐらい、私もやれることをいっぱいやりたいと思っているんですけど、皆さんにもちょっとだけ、「一人の100歩より 100人の一歩」ということで、少し森のことを考えてもらえるようなことがあると嬉しいなと

人類は森から生まれ

森を滅ぼした文明は続いていない

モリアゲ



一人の100歩より 100人の一歩

109

思っています。

以上、ひとしきりしゃべって恐縮でしたけれども、とにかく「みんなで日本の森をモリアゲよう！」ということで御清聴ありがとうございました。